

「近代読者」成立過程の図書館利用への影響

伊東達也

問題の所在

浅岡邦雄は、これまでの読書・読者の歴史をめぐる言説には「明治期における貸本利用というファクターがほとんど抜け落ちている」^①ことを指摘しているが、このことは貸本利用だけではなく図書館についても同様である。図書館利用者数は、帝国図書館の成立や大型の私立図書館の勃興した明治三〇年代後半以降急激に増える^②が、その増加の要因としては、一九〇〇～一九一〇年頃に起きた中学進学ブームに象徴されているように、図書館利用の中心が、純粋な読書から入学試験のための準備学習へと変わったことなどが、これまで指摘されている。^③

しかし、それ以前の明治二〇年代までの状況にあらためて注目してみれば、人びとの読書行為が、音読中心から黙読 (private silent reading) 中心へと変化しつつあった時期であり、日刊新聞や「小説」の発生により、出版数の増加とともに、読者そのものが成立してきた時期であることがわかる。新聞の普及により多くの人々にとって活字を読むという行為が日常的なものとなり、人々の読書がありかたが大きく変化したが、読書装置^④としての貸本屋と図書館の利用に大きな影響を与えたと考えられる。

そこで、明治三〇年代以降の急激な図書館利用増加の要因を探るために、明治二〇年代までを対象に、戯作から近代小説への過渡期のものとしての新聞の「つづきもの」記事の発生、その受容者としての新聞読者の発生を辿りながら、そのなかから、「近代」の小説読者ととも「図書館利用者公衆」^⑤が生まれてくる過程を明らかにしたい。

一 読書をめぐる三つの変化

江戸後期から明治三〇年頃までの間には、人々の読書をめぐる環境に、大きな三種類の変化が進行していたと考えられる。

- (一) 「漢字読書」↓「かな読書」〔漢字+カタカナ〕表記↓「漢字+ひらがな」表記
- (二) 「和紙・木版本」↓「和紙・活字本」↓「洋紙・活字本」
- (三) 「音読」〔共同読書〕↓「黙読」〔個人読書〕

(一)の「漢字読書」から「かな読書」への変化については、既に室町時代(一四・一五世紀)には、待ク拉斯だけでなく村の主

だった百姓や上層の女性までが「平仮名まじりの文書は書けるようになっていたことは確実^⑥」といわれているように、従来の「漢字読書」の読者ばかりでなく、このような「かな読書」をする読者層の拡大に対応して、娯楽読み物としての「黄表紙」が広く出版・流通するようになったことがあげられる。

(二)の木版本から活字本への変化については、書籍の活版印刷化と洋紙・洋装化への転換期は明治二〇年頃といわれているが、それ以前は混在が続いていた。明治初期のベストセラーである福沢諭吉『学問のすゝめ』の事例では、一八七二(明治五)年二月の初編は木版本として出版が始まり、一八七四(明治七)年一月の第四編から活版になる。しかし第十編(一八七五年六月)と第十二編から十六編まで(一八七五・七六年)は木版に戻るなど混乱が続き、一八八〇(明治一三)年の合本の出版でやっと活版印刷に統一されている^⑧。

また、『学問のすゝめ』の表記が、知識人むけの「漢字+カタカナ」から「漢字+ひらがな」に変更されたのは一八九八(明治三一)年の時事新報社版からであることからすれば、明治二〇年代までの「本」は、木版本と活字本、和紙(和装)・洋紙(洋装)が混在し、内容によって「漢字+カタカナ」表記と「漢字+ひらがな」表記が入り乱れるという状態であったといえる。

そして、このような多様な形態・表記の本を対象とする「漢字読書」と「かな読書」が混在した状況のなかから、読書という行為に、(三)「音読」から「黙読」へ、すなわち「家庭や地域や学校などの場で、しばしば音声にたよって読む」読みかたから、「本はひとりで黙って読む。おもに自室で、しかも自発的に」という読みかたへ

の、大きな変化が生じることになる。

このような変化につながる要因としては、新聞の連載記事を起源のひとつとする、近代文学としての「小説」の成立と、その読者(近代読者^⑩)の成立があると考えられる。

二 明治一〇年以前の読書と読者…読み本から新聞へ

大人を対象とした娯楽読み物としての「黄表紙」の誕生は、一七七五(安永四)年の『金々先生栄華夢』の刊行といわれているが、娯楽本を中心とする江戸後期の読書の広がり背景には、『經典余師』などの自学自習本による大衆の自発的な勉強熱があったことが指摘されている^⑪。「黄表紙」には当時の読書の様子も描かれている。

両女がさし向ひ、物の本や合巻などを取り散らし、簪を抜いて読みかけたる本の間へ葉に挿み、下に置き、

おろく「お豊や、此本を鳥渡まあお読、誠に可愛さうな所や、

哀れな所があるだらう」

おとよ「オヤそりや読み本とやらだねえ」

おろく「あ、好文士伝と云ふ為永の新作だよ」

おとよ「オヤ夫れじや面白いねえ、姉さん私にも些と読んで

お聞かせな」

おろく「あ、その代わり読み質に、嘉喜餅でも焼くなら」

おとよ「かき餅でも何でも焼くから」

これは舟宿の女将が妹に人情本の朗読をせがまれる場面だが、同時期の雑俳(川柳)に、

絵草紙の見台にする釜の肩

幾度も源氏はあかぬ書物にて

借し本の中にどこのか楊枝差

というものもある。¹³⁾ 為永春水の「好文士伝」（読本『芳薫功話好文士傳』、為永春水作）が出版されたのは一八四〇（天保一一）年であり、遅くともこの時期には、読書を楽しむ層が、素読の訓練をうけた武士階級だけでなく、農民、商人、職人にまで広がっていたことがうかがわれる。

このような一般庶民の識字率の高さや読書習慣の浸透ぶりは、外国人から見ても特異であつたらしく、明治期になると次のような記録があらわれる。

人夫たちや別当：小使つまり召使、さらにどんな店でも茶店でも見かける娘たち―彼らがみんな、例外なく何冊もの手垢にまみれた本を持っており、暇さえあればそれをむさぼり読んでいた。彼らは仕事中はそうした本を着物の袖やふところ、下帯つまり日本人が未開人よろしく腰に巻いている木綿の手ぬぐいの折り目にしまっている。：後になって分かったが、日本の下層階級のほとんど唯一の精神的糧といふべきこれらの俗っぽい出版物は、上流階級の人間（良家の子女までふくめて）にも読まれているのであつた：数百冊におよぶそうした小説のもつとも大きなコレクションは、いろは文庫と総称されている。いろいろとは、ABCのことであり、この名称はこの文庫が古典的な漢字ではなく、この国の教育程度の低い人々のABCともい

うべき平仮名で書かれていることに由来する。¹⁴⁾

これは、パリでの岩倉使節団との出会いをきっかけに一八七四（明治七）年に来日し、それから一年半という短い滞在期間に東京外国語学校でロシア語を教えた帝政ロシアからの亡命者、レフ・メーチニコフの回想録の一節である。メーチニコフの滞在時期からすると一八七五（明治八）年ごろの様子であるが、このときに人夫や茶店の娘たちが読んでいた「手垢にまみれた本」とは、貸本屋から借りた、平仮名書きの和紙木版本であつたと思われる。ちょうどこの頃（明治七年一月二日）に創刊された『読売新聞』にも、当時の読書の様子は描かれている。

本所撞木ばし際の木下良三の娘おえるは十六に成り本が好きにて新聞も朝野と読売は毎日よみ親へは孝行をいたし実におとなしい生れつきにて弟も六ツに成りますが是も本がすきにて或る日母と仏參にゆきおえるは諸方の墓の戒名も大概よみましたが中には読めぬ文字が有ると頻りに考がへて居て歩行ぬほどなるが読めぬ文字はよく覚えて帰り親父に聞くほどにて並の娘のやうに寄せや芝居の事に浮身をやつすもの達とは挑燈と釣がねほど心がけが違ふといふ『読売新聞』一八七五（明治八）年五月一七日]

下総の国行徳在鬼越村の鈴木といふ家の息子初太郎は八ツぐらゐにて近ごろは殊の外本手習を精出し夜分も落付て寝られぬとみえて或る夜十二時ごろに起て本をよみ出すを両親は不審にお

もひ今ごろ本など読むは定めし狐か狸がついた事で有ると心配をして騒ぎたてたるを折よく泊り合せて居りし小網町辺の瀧口歌助といふ人が初太郎の両親にむかひ何も狐や狸の業ではない全く夫は本に心をかけて居るゆゑ夜分もおもひ出しては読む事だと再三いひさとされて漸やく合点したといふ田舎には妙な事をいふ親も有りまじやう東京には彼やうな親は有りませぬ

『読売新聞』一八七五(明治八)年五月二五日

上総の国夷隅郡の内野学校にては教師の下村といふ人と外に藍野といふ人をはじめ二十人ばかりも相談して誰かにかぎらず本や新聞を見せる所をこしらへ一ヶ月に三度づゝ人を集めて講釈もきかせ評もさせて人々が伶俐になるやうに力をつくします

『読売新聞』一八七五(明治八)年一〇月一九日

紅梅といふ娼妓は本をよむことが好で新聞は勿論心がけてよみ当六七月のころも余り細い字を見つめるので眼を煩らつたほどの感心なおゐらんだと辰巳大のやさんより知らせて来ました

『読売新聞』一八七五(明治八)年一月一八日

甲州飯沼村の龍花院へ宿をとつて居る大工は山梨県の裁判所が建つので東京より参つて居りますが此大工は東京囃殻町一丁目の金蔵といつて若い男に稀な辛抱人で此せつ每ばん三時ごろまで読書に勉強いたし年季は九年になるが一度も遊びに外へ出た事もなく仕事の外は座て本を見て居るので友人が九年辛抱したから寺の達磨くんと字をつけて居るくらゐだと甲州の人の感心

して手紙を送られました『読売新聞』一八七六(明治九)年二月一四日

各新聞が創刊当初であつたこの時期は、政策の一環として全国に新聞縦覧所¹⁵や新聞解話会¹⁶が設けられ、普及が奨励されていたことが知られているが、その背景には、新聞が高価であつたことと「漢字+カタカナ」表記を読めない人々が多かつたことがある。だからこそ、この頃には音読による共同読書も広く行われていた。

また、一八七五(明治八)年には、日本初の近代公共図書館といわれる東京書籍館が開館しているが、このことも新聞で報じられている。

本日十七日より湯島書籍館に於て和漢洋の書籍及各種の諸新聞を中外人民の望に任せて縦覧を許さる此挙貧書生の幸福政府の人民を愛するの厚き諸人此恩旨を体し智識を開暢すべきなり

『日新新事誌』一八七五(明治八)年五月二二日

神田宮本町の書籍館(旧の聖堂)にて明後日より書物類また諸新ぶんまでも諸人に読まする事を御許しに成りました御上のおせわは厚いもので有ります

『読売新聞』一八七五(明治八)年五月一五日

東京書籍館(元聖堂)にて和漢の本五萬冊と洋書を八千冊其外新聞雜報類迄も無料で見せて下されますが其規則は近日附録へ出ます

『読売新聞』一八七五(明治八)年一月二〇日

とあり、実際に『読売新聞』には、東京書籍館の利用規則が一月二四日と一二月四日に掲載されている。また、東京書籍館自らも

自今国内新刊の書籍ハ悉皆本館に於て覧閲せしむ爰に広告す

明治九年二月 東京書籍館『読売新聞』一八七六(明治九)

年二月二四日

という広告記事を定期的に出して利用を奨励していた。

周知のように、東京書籍館は、先の一八七二(明治五)年に設立された「書籍館」の運営が文部省から太政官(博覧会事務局)へと移管されたために、その名称と施設(元聖堂)だけを継承して文部省が新たに設立した図書館(書籍館)である。もとの「書籍館」の蔵書は博覧会事務局によって浅草に移され公開されることになるが、この「浅草文庫」についても新聞記事が出ている。

博物館の附属浅草文庫(浅草御蔵前片町三十一番地)にて和漢洋の本類を朝八時より午後四時まで一日分一銭にて見させて下さります『読売新聞』一八七五(明治八)年一月二四日

東京書籍館は「無料」、浅草文庫は「一日分一銭」と違いがあるところが興味深いが、新聞で公示された東京書籍館の規則には、無料であることのほかに、館内での音読禁止が強調されている点が注目される。

○東京書籍館規則○第一章本館設立の主旨ハ所有の書籍を内外人の求覽に供すべきを以て此の規則に照準するときハ何人にも登館して適意の書籍を展覧するを得せしむ○第二章本館ハ毎日午前九時を以て開き午後第五時に至て閉す但し短日にハ第五時前と雖も日没を以て期とす…○第四章書籍類ハ一切館外に出す事を禁す但し文部卿の特示あるハ此限に非ず…○第十章館内に在てハ誦読を禁し且雑談吹煙を禁す『読売新聞』一八七五(明治八)年二月四日

この東京書籍館をよく利用していたひとりに、思想家・政治家の植木枝盛がある。植木は、一六歳から二二歳までの間、一八七三(明治六)年と一八七五(明治八)から一八七七(明治一〇)年にかけて東京に在住していたが、新聞の閲覧と読書を通じて精力的に学んでいた時期であったように、当時の日記には「新聞紙貸覽所に過、新聞雜誌¹⁷⁾を看」(一八七三年二月二八日)、「新聞紙貸覽所に至、新聞紙を看る」(一八七三年三月一六日)、「午后より三田演説会へ往く。夜分なるを以て芝山内に到り新聞縦覧店に過り六時まで新聞をみ」(一八七五年六月五日)、「午后書籍館に往、民間雜誌、評論新説を読む」(一八七五年六月一日)、「午后九時半より午後二時半まで書籍館に於て代議政体を読む」(六月二三日)というような記述がしばしば見られる¹⁸⁾。

家永三郎は植木の読書の特徴について次のように分析している。

外国語を習得しなかつた彼は、当然の結果として、全然原書を讀まなかつた。これはアカデミックな観点から云えば、たしか

に大きなマイナスであったろうし、また欧米の思想や制度の個別的・歴史的的理解に不完全な点を生じたであろうことも、否定できない。…彼は、原書の代わりに、めばしい翻訳書―それも不完全な翻訳が多かったにもかかわらず―を片はしから読破することににより、欧米のブルジョア―デモクラシーの精神を的確に自分のものとすることに成功したのであった。¹⁹⁾

福沢諭吉に師事した植木は福沢の教えに従って欧米の制度や思想について独学しているが、この時期の植木の読書に大いに力となったのが、納本制度により国内で刊行された翻訳書は全て閲覧することができた東京書籍館であった。

先にあげた記事によれば東京書籍館にも新聞が備えられていたことがわかるが、植木は新聞については、当時まだ盛んだった新聞縦覧所を利用して読んでいる。「東京書籍館規則」からすれば、植木の読書法は、新聞縦覧所では音読、東京書籍館では黙読であったかもしれない。

三 明治一〇年代の読書と読者…「つづきもの」記事の発生

本田康雄は、江戸時代の戯作が独立した文芸としては明治一〇年代でその命脈が断たれたことを指摘しているが、その戯作に代わって読者を集めたのが、「つづきもの」と称される戯作の文体で書いた新聞の雑報記事であった。

雑報記事とは、犯罪、情痴、火事、地震、珍談、奇談などの、現代の三面記事に相当する記事であるが、一八七五（明治八）年頃からこの雑報記事に挿絵が付された上で連載化されるようになり、新

聞で娯楽読み物が提供されるような状態となる。前田愛によれば、「黄表紙」などの草双紙で戯作を楽しんでいた庶民の読書習慣を变える直接のきっかけとなったのは、このような戯作者出身の記者による新聞の記事であり、なかでも、『東京日日新聞』や『郵便報知新聞』などの漢文調の大新聞ではなく、『読売新聞』や『かなよみ新聞』などの、ひらがな中心、ふりがな付きの小新聞であった。²³⁾

前田は、「毎朝配達される小新聞の「つづきもの」の魅力から、民衆は毎日定量の活字を消化する習慣を体得することになるのである。三日から十日の間隔で戯作小説の続編をとりかえにまわってくる貸本屋の継本制度などは、まったく間のびのした旧弊の遺物になってしまった²⁴⁾」としているが、実際に当時の新聞には、

浅草の奥山の新聞縦覧所に高く積み上げた荷を背負った貸本屋が休んでいるの話に此頃は新聞に圧れて貸本の出がわるく成りました『読売新聞』一八七六（明治九）年五月一〇日]

近ごろ新聞雑誌が流行にて絵草紙屋へも余ほど響くとかいふが或る貸本屋の話に凡そ悪いものは新聞屋で新聞紙が出来てからは花主が半分に減じてしまつたとブツ／＼苦情をいつて居るのはお気の毒なこと『読売新聞』一八七八（明治一一）年四月二八日]

という記事がある。このような、戯作小説や軍記物などの「草紙」を風呂敷に背負って巡回する旧来の貸本屋が衰退し、代わって店舗を構え、貸出し目録を配布して、新刊学術書などの「物の本」を廉

借貸しする「新式貸本屋」が登場するのが明治二〇年前後のことであるところからしても、娯楽読み物を提供するメディアの主力は、明治十年代に「草紙」から新聞（小新聞）に代わったといえるだろう。

また、戸別の配達ではなく新聞を路上で「読み売り」することが、警視庁により一八七九（明治一二年）一二月に禁止されるが、これにより小新聞は、従来の互版的な性格をあらため、定期刊行物としての性格を鮮明にしなくてはならなくなった。このことも、新聞の連載記事が読み物として発達することにつながったと思われる。当初は新聞普及のために設けられていた新聞縦覧所も、

新聞縦覧場 府下の新聞縦覧場が此の節皆止めになりし訳ハ人の見て仕舞て最う古くなつた新聞を唯にて貰つて来て看せたり又見料を取つたりした故追ひく客が来なくなり自つと止めに
なりしとのことより『自由燈』一八八四（明治一七）年五月
二九日

とあるように利用が少なくなり、その内容も変化していった。明治一〇年代は、新聞というメディアが、不安定・不定期なニュース媒体から日常的なジャーナル（定期刊行物）へと成長していった時期であるといえるだろう。

では、これらの新聞はどのように読まれていたかといえば、明治二十年代以前では、まだ全国的に識字率も低く、江戸期の読み本とおなじように、音読、すなわち家庭や地域での共同読書が多く行われていたようである。

大坂本町四丁目森田小八の娘おとらは年が十六にて芝居や寄席へも精出して通つて居り直に向ひの村上真齋といふ人は新聞が大好きで近所の娘子供へも常々読んで聞かせお虎も参つては聞きだんく新聞へ心が移つて三味線もやめ踊りも止め三種のふりがな新聞を取寄せて見る様になり始のうちは親達も新聞などを読むと高慢になつて悪いと止めてもお虎は聞入れず親父も追々ひき込まれて此節は大坂攪眠新誌などを取寄せて見るから世間の様子も知れ全く村上さんのお蔭だといつて悦んで居る『読売新聞』一八七七（明治一〇）年四月二三日

埼玉県下秩父の白久村に居る山中右助の孫暉之助ハ小学校へもよく通ひ休暇の日に町へ出て近世史略を買つて帰ると親父が見てこんな分らない書を出して買つて来とハとんでもない馬鹿野郎だとて大きに叱られ暉之助がいふにハ祖父さんが疝氣で寝ておいでだから退屈だと思つて買つて来ましたといふので祖父さんに見せると祖父ハ大きに悦び其本を読んで聞かせたので親父も感心し始めて本といふものハ善物だと心付きましたが当時ハ親が子供のために閉口する事がまゝ有ります『読売新聞』一八七七（明治一〇）年四月五日

奥へ来て新聞を読んで聞しておく昨日の続きが出てゐるからと急立てるを三之介は押とめ読でお聞せ申しませうが貴嬢は兎角に色咄や情死ものがお好で為になる咄を聞きなさらぬ故新聞を買ふのも無益であります『岡本起泉』『花岡奇縁譚』、一

八八二（明治一五）年」

このような新聞の連載雑報記事「つづきもの」の発展形として、文芸としての新聞小説が生まれることになるのだが、日本で最初の新聞小説は、『読売新聞』に一八八六（明治一九）年の一月四日から三月二〇日まで連載された「鍛鉄場の主人」（ジョルジュ・オネー原作の小説の翻訳）であるといわれている。この翻訳・執筆を担当した加藤瓢乎は、連載開始の直前、社説にあたる「読売雑譚」で、『読売新聞』に「小説」を連載することになった経緯を次のように解説している。

新聞紙上の小説 或る人閑人を語りて曰く、足下の従事する処の読売新聞に記載する処の統話しは殊更ら奇異の説を構造し又は猥褻の字句を挟む等の事なしと雖も、其の書く処のもの小説に類し、然も趣意もなく寓意も無く唯事実を述るに過ぎざれば、此の如きものを他の雑件に混載せんよりは寧ろ純然たる小説を編述し之を別欄に記載するに如かずと、是甚だ正当の説にして閑人大に賞賛する処なり…試みに其例を欧米の新聞紙に求めたるに、毎週発刊の新聞紙等には必ず小説を掲げ、日々発刊の新聞と雖も其例少なからず…然れば我読売新聞に小説を掲ぐるも敢て不可なきことにより、来春よりは別欄を設け、日々二章づつの編述したるもの或ひは欧米の小説中最も佳なるものを選びて登載し、自余の小説類似の続き話しは一部廃さんことを希望せり『読売新聞』一八八五（明治一八）年二月二七日」

ここに、新聞小説がそれまでの連載雑報記事（「統話し」）に代わるものとして日本の新聞に登場したことがわかるが、この記事のなかで加藤に新聞への小説掲載を勧めた「或る人」とは、同年に『当世書生氣質』と『小説神髓』を発表したばかりの坪内逍遙であったといわれている。²⁹⁾

周知のように、坪内逍遙はこの後一八九〇（明治二三）年から読売新聞の主筆となつて小説欄を主宰し、それが明治二〇年代のいわゆる紅露時代の隆盛を招いたともいえるが、娯楽読み物としての新聞小説の読まれかたについては、前代の「読み本」と同じく、まだしばらくの間は、音読による共同の享受形態も続いていたようである。³⁰⁾

一方、この時期の図書館としては、西南戦争の影響で東京書籍館が一時的に東京府へ移管された後、一八八〇（明治一三）年に文部省の管轄に復して改称した東京図書館が、一八八五（明治一八）年まで湯島にあった。その後、この東京図書館は同年九月に東京教育博物館との合併のために上野に移転し、それに伴つて運営規則が大幅に改定されることになる。

まず、「本館図書ハ従前無料ニテ求覽ヲ許シタレトモ」、「唯求覽人員ノ増加スルノミニシテ頗ル雜沓ヲ極メ真正読書ノ人ヲ妨ルノ弊ナキヲエザルヲ以テ」という理由で「一人一回分ヲ金一錢五厘トシ別二篤志者ノ為メ二十回分金十錢」の閲覧料が徴収されるようになり、加えて、それまで「文部卿ノ特許アル者」に対して館外貸出が行われていたところを、「該特許票ヲ有スル者既二百名以上」に達し、「館外貸出ノ図書毎二百五十冊ニ至リ來館求覽者ノ便ヲ欠クト少カラサル」状況となつたため、以後、館外貸出は「複本ノ蔵書

アルモノ二限ル³³」こととなった。

また、上野に移転したために「其ノ地ノ僻在シテ求覽者ノ往復ニ便ナラザルヲ以テ」という理由で、東京書籍館以来続けられてきた夜一〇時までの夜間開館も廃止された³⁴。

そして、一八八七（明治二〇）年には、同年三月に東京神田に大日本教育会書籍館が開館したことをうけて、東京図書館は、蔵書中の「通俗ノ図書数百部」を、向こう一〇年間大日本教育会書籍館に貸与することになる³⁵。

以上のような移転に伴う一連の改変により、当時唯一の官立公開図書館であった東京図書館は、明治二〇年前後に、格段に使いにくい読書施設となつてしまい、利用も減少する³⁶。しかし、それでも「上野の山」に通つてきていたのが、田山録弥（花袋）であった。

上野の図書館は、其時分はまだ美術学校の裏の方にあつた。私にとつては、その図書館は忘るべからざるもの、一つである。私は一週に二三度は必ず牛込の山手から出てくると其処へ出かけて行つた。…私は終日長く本を読んだり空想に耽つたりした。閲覧者は大勢居るけれども、少しでも声を立てると、しつと言はれるので、室内は水を打つたやうに静かで、監視のりをり静かに通つて行くスリツパの音が聞こえるばかりであつた。…私は近松、西鶴をすべて其処で読んだ。「国民之友」に出た蘆花君の翻訳になつた六号活字の外国文学の紹介、それは殊に私には有益であつた。まだ十分に外国の雑誌を読むことも手に入れることも出来ない私に取つては、未知の外国文学に入つて行く唯一の手引草であつた。ツルゲネフの『獵人日記』の梗概、中

でも『山番』の紹介が私を驚かした。私は段々トルストイ、ドストエフスキイ、ゴーゴリなどといふロシア文学の作家達の名を知つた。…トルストイの『戦争と平和』の英訳は、其時分から図書館にあつた。で、私は半分位しかわからなかつたけれど、兎に角毎日行つてはそれを読んだ³⁷。

田山が東京図書館に通つたのは一七歳から二〇歳までであり、一八八八（明治二一）年から一八九一（明治二四）年頃までの回想である。図書館内での「音読禁止」がますます厳しくなつていくことがわかるが、それでも当時の学生に人気があつた雑誌『国民之友』だけでなく、近松、西鶴、さらにトルストイやドストエフスキイなどの外国文学を読むのにも図書館を利用していたことがわかる。

また、『経国美談』や『佳人之奇遇』などの政治小説が若者に好まれていたのもこの頃である。徳富蘆花の自伝的小説に、当時の学生寄宿舎での読書の様子が描かれている。

佳人之奇遇の華麗な文章は協志社にも盛んに愛読され、中に数多い典麗な漢詩は大抵書記された。敬二が同級で学課は兎に角詩吟は全校第一と評された薄痘痕の尾形吟次郎君が、就寝近い霜夜の月に、寮と寮との間の砂利道を「我所思在故山：月横大空千里明、風揺金波遠有声、夜蒼々兮望茫茫、船頭何堪今夜情」と金石相撃つ鏗鏘の声張り上げて朗々と吟ずる時は、寮々の硝子窓毎に射すランプの光も静かに予習の黙読に余念のない三百の青年ぶるくと身震ひして引き入れられるやうに聞き惚れるのであつた³⁸。

一八六八（明治元）年生まれの徳富蘆花の年齢からすれば、一八八七（明治二〇）年前後の様子だが、『佳人之奇遇』は、一八八五（明治一八）年に初編が刊行された後、一八八八（明治二一）年までに四編まで刊行されている。文中の要所に漢詩をちりばめたようなこれらの「政治小説」が、どのように読まれていたかといえ、読書能力が低いために他人が音読するのを聞いて理解するというよりも、あえて音読・朗読することで気持ち鼓舞し、それを聞いている仲間と感動を共有するという共同読書であったようである。

四 明治二〇年代の読書と読者——「近代読者」の誕生

ところが、明治二〇年代半ばになると、そのような読書の状況に大きな変化が生じることになる。その変化の要因は、学校教育の普及による識字率の向上などではなく、この時期、坪内逍遙や尾崎紅葉、山田美妙、二葉亭四迷などによって模索されていた「言文一致体」の文体の確立であった。画期となったのは、二葉亭四迷が一八八八（明治二一）年に雑誌『国民之友』に発表した、ツルゲーネフ「あひびき」の翻訳である。当時中学生であった蒲原有明の感想に、当時の読者に与えた衝撃の大きさがあらわれている。

明治二十一年の夏のころであつたが、わたくしは未だ中学の初年級であり、文学に対する鑑賞力も頗る幼稚で、その頃世間にもてはやされてゐた「佳人の奇遇」などを高誦してゐたぐらゐであるから、露西亞の小説家ツルゲーネフの短篇の翻訳といふさへ不思議に思はれ、ただ何がなしに読んで見ると、巧に俗語

を使つた言文一致体——その珍らしい文章が、これがまたどうであらう、読みゆくまゝに、わたくしの耳のそばで親しく、絶間なく、綿々として、さゝやいてゐるやうに感じられたが、それは一種名状し難い快感と、そして何処かでそれを反発しようとする情念とが、同時に雜りあつた心的状態であつた。さてそれを読み了つて見ると、抑も何が書いてあつたのだから、当時のうぶな少年の頭には人生の機微がただ漠然と映るのみで、作物の趣旨に就ては一向に要領を得なかつた。それにも拘らず、外景を描写したあたりは幻覚が如何にも明瞭に浮ぶ。…兎にも角にも、わたくしの覚えたこの一篇の刺戟は、全身的で、音楽的でも、また当時にあつてはユニクのものでもあつた。⁸⁹⁾

「耳のそばで親しく、絶間なく、綿々として、さゝやいてゐるやうに感じられた」という蒲原有明の反応について、前田愛は、「黙読をしても其者に調子が移つて、どんなに殺して見ても調子だけは読む者の心に移る文章」をめざしていた訳者二葉亭四迷の意図と正確に対応していることを指摘し、このような「作者と読者の内密な交流がもたらす快い戦慄とかすかな反発」を読者が感じたことについて、「読者は他人を交えることなく孤独で作者と向き合い、かれが囁く内密な物語に耳を傾ける。このような秘儀に参与する資格を許された読者こそ、「近代」の小説読者ではなかつたろうか」と「近代読者」誕生の瞬間を言い当てている。⁹⁰⁾

前田の指摘のように、二葉亭四迷の「あひびき」の文体は、他にはない画期的な言文一致体であつたと考えられるが、その根底には二葉亭独自の文章観が反映している。坪内祐三は、二葉亭四迷の文

章観や個性的な口語文体の由来は、二葉亭四迷が東京外国語学校ロシア語科で受けたロシア文学の授業^①にあったとして、「知らず知らずの内に、二葉亭たちは、西洋流の文学の読みを身につけていた」としている。

二葉亭四迷の文体が、他の文学者のそれとは異なり「黙読をしても其者が調子が移つて、どんなに殺して見ても調子だけは読む者の心に移る」ことをめざしてつくられた文体であり、そのような文章観が、ロシア文学の影響による近代文学理論に基づくものであったとすれば、この翻訳「あひびき」の成立は、日本における「近代文学」成立の一端であるといえるだろう。

そして、このような「近代文学」成立の場に立ち会ってしまった読者は、「他人を交えることなく孤独で作者と向き合」うこと（private silent reading）を求められる「近代読者」とならざるを得ない。

中学生の蒲原有明は、「耳もとで、だれかが親しく絶え間なくささやいているような快感」を感じているが、一度でもこんな体験をしてしまったら、音読による「共同読書」の世界にはもう戻れない。蒲原有明だけでなく、国木田独步（当時一七歳）、島崎藤村（一六歳）、田山花袋（一六歳）、柳田国男（二三歳）など、雑誌『国民之友』の熱心な読者であった若者たちに「あひびき」が強烈な衝撃を与えた時期を一八八八（明治二一）年であるとすれば、これを境に、以後「近代読者」が全国に増えてゆくことになる。

おわりに — 「近代読者」と図書館

日本人の読書習慣の主流が、明治三〇年代に音読から黙読に移行

したことについて、この「近代読者」成立の影響は、決して小さくないといえるだろう。「private silent reading」によって読書を楽しむことのできる人々が増えるにつれ、そのために図書館を利用するひともでてくる。

一九〇六（明治三九）年に小説を読むために帝国図書館に行ったひとが、大勢の受験生の熱気に圧倒されて早々に退散せざるを得なかったという記事があるが、周知のように、明治三〇年代以降は、図書館利用者の大半を学生や受験生が占めるというような状態が続くようになる。

しかし、そのような中にも図書館での「黙読」を楽しむことのできる読者は存在していた。一九〇二（明治三五）年に開館した大橋図書館でも、学生以外の来館者が読書を楽しんでいる様子が報告されている。

六月某日、日曜日、朝晴れの日影麗らかなるま、麹町区番町の大橋図書館へと出かけた。…無論学生が七分通りではあるが、上野では一人も見られない十二三の小学児童や、軍服の兵士が当館では見られる。諸氏の多く如何なる書籍を見て居らる、かと思つて、失礼ではあつたがそれとなく覗いて見ると、中には数学、医学、文学の専門書も無いではないが、其の主なるものは先づ雑著であつた。文学とも就かねば、史学とも就かねもの、乃至随筆、修養物であつた。…同一の学者でさへ研究もやれば娯楽の読書もする…何れにしても読書好の人であるから、都合で上野、大橋その何れに赴かぬとも限るまい。^④

明治八年に開館したばかりの東京書籍館で、植木枝盛は翻訳書による学習に余念がなかった。植木にとつての図書館は、後の帝國図書館に大挙した受験生と同じく「勉強空間」でしかなかったであろう。

しかし、後には東京図書館での田山花袋のように、日課のように通つてきては終日滞在し、小説や外国文学を楽しんだり「空想に耽つ」たりする「近代読者」も、少数派ながら存在するようになる。このような「図書館利用者公衆」が着実に増えてきたのも、明治三〇年代であつたといえる。

注

- (1) 浅岡邦雄「明治期」『新式貸本屋』と読者たち―共益貸本社を中心に―『明治期新式貸本屋目録の研究』作品社、二〇一〇年、一三頁。
- (2) 文部省の統計（『文部省年報』）によれば、全国の図書館の閲覧人数の合計は、明治三四年に初めて一〇万人を超え、その後三七年に五〇万人、四一年に百万人、四五年には三七〇万人に達している。
- (3) 伊東達也「苦学と立身と図書館…パブリック・ライブラリーと近代日本」青弓社、二〇二〇年、二〇九頁。
- (4) 伊東達也「読書装置としての貸本屋と図書館」『山口国文』四三号、二〇二〇年。
- (5) 永嶺重敏は、明治十年代にある程度の量的厚みをもって図書館利用者層が形成されてきた現象に呼応して、これらの利用者層をとらえる名称として新しく「公衆」という概念が図書館界

に登場してきたことを指摘している（永嶺重敏『読書国民の誕生』日本エディタースクール出版部、二〇〇四年、二二八頁）。

(6) 網野善彦『日本の歴史をよみなおす（全）』ちくま学芸文庫、二〇〇五年、三五頁。

(7) 反町茂雄「明治大正六十年間の古書業界」『紙魚の昔がたり明治大正篇』反町茂雄編集、八木書店、一九九〇年、二二頁。

二十年頃を境として、出版界は急激に洋紙・洋装に二変します。おかれていた文学的作品でも、二十一年には和装のものは殆ど出ません。

(8) 伊藤正雄「学問のすゝめ」の成り立ち『学問のすゝめ』講談社学術文庫、二〇〇六年。

(9) 津野海太郎『読書と日本人』岩波新書、二〇一六年、九九―一〇〇頁。

(10) 前田愛「音読から黙読へ…近代読者の成立」『前田愛著作集 第二巻』筑摩書房、一九八九年、一四九頁。

(11) 鈴木俊幸『江戸の読書熱』平凡社、二〇〇七年。

(12) 為永春水『秋色艶麗処女七種五編』人情本刊行会、一九二六年、二七四―二七六頁。

(13) 長友千代治『江戸時代の書物と読書』東京堂出版、二〇〇一年。

(14) メーチニコフ『回想の明治維新…ロシア人革命家の手記』（渡辺雅司訳、岩波文庫、一九八七年）、二一八―二一九頁。

(15) 『郵便報知新聞』一八七二（明治五）年九月
横浜市中有志の人々集まり新聞紙縦覧館ヲ取設け東京西京浪華

其外西洋各国種々の新聞紙を館中に備へ置き轉閱を乞ふ者は時限を言わず見料の費を勞せず他見に供せんと企てなせしと誠に人智を増すの捷徑なるへし

(16) 『読売新聞』一八七七(明治一〇)年四月二〇日

山城国紀伊郡横大路村の梅木治三郎は早く開化にしたいとて近所のものを集めて深切に新聞の講釈をして聞かせるのはいかにも感心でござります

(17) 一八七一(明治四)年に創刊された新聞『新聞雜誌』を閲覧していることがわかる。

(18) 植木枝盛「植木枝盛日記一」『植木枝盛集第七卷』一九九〇年、岩波書店。

(19) 家永三郎『植木枝盛研究』一九六〇年、岩波書店、五七一―五八頁。

(20) 新聞の種類が増えてくると、図書館で所蔵・提供される新聞は一部に限られるようになってくる。

大坂府書籍館にては是まで各種の新聞紙を備へ置かれ広く縦覧を許されしが如何の都合にや此ほどより東京日々新聞明治日報と大東日報の三種のみを備へられその余の自由改新主義の少しでも雑った新聞ハ一切用ひられぬといふ『読売新聞』一八八

二(明治一五)年七月七日]

(21) 本田康雄『新聞小説の誕生』平凡社、一九九八年、三〇五頁。

(22) 前掲21、六二頁。

(23) 前田愛「明治初年の読者像」『前田愛著作集第二卷』筑摩書房、一九八九年、一一一頁。

(24) 前掲23、一一二頁。

(25) 前掲23、一一二頁。

(26) 東京の新聞縦覧所は「明治30年代に入ると、怪しげな女性が客をひく魔窟へ内容を一変していった」といわれている(興津要『明治新聞事始め』大修館書店、一九九七年、三〇頁)。

(27) 齊藤泰雄は、明治初期に文部省が行った各県の自筆率調査から一八八六(明治一九)年当時の識字率の平均を男子で五〇(六〇%)、女子で三〇(前後と推計している(齊藤泰雄『識字能力・識字率の歴史的推移―日本の経験』『国際教育協力論集』一五巻一号、広島大学教育開発協力研究センター、二〇二二、五三一―五四頁)。

(28) 岡本起泉『花岡奇縁譚』初編下、鳥鮮堂、一八八二(明治一五)年。

(29) 前掲21、一六二頁。

(30) 「本社文学上の主筆として文学士坪内雄三氏を招聘し、なお紅葉山人、露伴の両氏も本社招聘に応じて入社されたり」『読売新聞』一八九〇(明治二三)年一月二三日。

(31) 坪内逍遙の『当世書生氣質』にも花魁が客に読売新聞を読んで聞かせてもらう場面がある。

吉「ヤ生意気に絵のない新聞をとるうちがをかしい。読売新聞たア、いやに素人じみるじやアないか。」トいひながら新聞をとりあげる。秀「御自分ひとりで承知してゐないで早く読んでおきかせなさいヨ。」吉「さらバこれより、エヘン読み。あげ引ますヨ。」(坪内逍遙『当世書生氣質』岩波文庫、二〇〇六年、二一九頁)。

(32) 「東京教育博物館ト合併及規則改定ノ件」『東京図書館明治十

八年報』(『帝国図書館年報』、八五頁)。

(33) 前掲32。

(34) 前掲32。

(35) この通俗図書の貸与には、東京図書館を一般的な公開図書館から学術書等の収集・保管を中心にした参考図書館に改組する計画の一環として、大日本教育会書籍館を普通図書館として整備充実させる文部省の意図が含まれている。

(36) 規則改定後の明治一八年度の求閱人員数は七三七七一人、貸付(閲覧)冊数は二九四〇〇五冊と、それぞれ前年に比べて約四割(四二二五人、一八三二〇八冊)少なくなっている(求閱人員ノ件)、『明治十八年東京図書館年報』)。

(37) 田山花袋『東京の三十年』(『明治文学全集99』明治文学回顧録集(二))筑摩書房、一九八〇年、一八一―一九頁。

(38) 徳富健次郎『黒い眼と茶色の目』岩波文庫、一九三九年、九六一―九七頁。

(39) 蒲原有明『「あひびき」に就て』(『明治文学全集九九 明治文学回顧録集(二)』筑摩書房、一九八〇年)。

(40) 前田愛『音読から黙読へ―近代読者の成立』(『前田愛著作集 第二巻』筑摩書房、一九八九年、一四九頁)。

(41) 東京外国語学校で二葉亭四迷と同級だった太田黒重五郎は、自伝のなかでこの授業について語っている。

その当時の教へ方が大変良い教へ方で、露西亞文学を教へてくれた。文学論も露西亞人が先生であった。…本は一冊しかないのだから、それを先生が読む。私共は本も何もなかっただ聴いてゐる。詩や、優れた小説類を読んで聞かせる。それは実に面白

いもので、実に愉快なものであった。…露西亞語のハラクテリスチカーこのヒーローはどうだとか、こうだとか、所謂キャラクターを書くこと、それが私共の文章の稽古だった。その書いた文章を出すと先生が直してくれる。本も楽に読めて字引きなど引かない。解らない字が時々あつてもそんなことには拘泥ない。多くは寝転びながら喜んで読んだものだ(太田黒重五郎『思ひ出を語る』河野磐城編、太田黒重五郎翁逸話行会、一九三六年)。

(42) 坪内祐三『学制改革が二葉亭を作家にした』(『慶応三年生まれ七人の旋毛曲り』新潮文庫、二〇一一年、一四〇頁)。

(43) 二葉亭四迷『予の愛読書』(『二葉亭四迷全集』四巻(評論・談話)筑摩書房、一九八四年、一六四頁)。

(44) 漱石の「吾輩は猫である」(第八回、明治三九年発表)のなかにも、この小説を“Private silent reading”で楽しんでいる読者の姿がうかがえる記述がある。

一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、その一字一句が層々連続する首尾相応じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうっかりと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる法語となるんだから、決して寐ころんだり、足を出して五行ごと一度に読むのだからと云う無礼を演じてはいけない。柳宗元は韓退之の文を読むごとに薔薇の水で手を清めたと云う位だから、吾輩の文に対してもせめて自腹で雑誌を買つて来て、友人の御余りを借りて間に合わすという不始末だけはない事に致したい(夏目漱石『吾輩は猫である』新潮文庫、二〇〇三年、三二九頁)。

(45) 「図書館と小説」『東亜の光』一巻一号(明治三九年五月)。

数千の読書子閲する所の書、大部分は法律医術の書にして其然らざるものと雖も検定試験準備的或は特殊職業的の専門學術に關する書籍を孜孜として閲読する者其状悶々として或るは時期に後るゝの不安、或は理解完からざるの苦惱、歴々として其額に現はる。…余の傍に座せる二三の焦熱子は申し合はせたるわたるが如く余の顔をデロデロと眺め、恰も余を以って不勉強となして侮る如き状を示すにあらずや

(46) 嶮峯樵夫「図書館のぞき」『中学世界』一〇卷八号、一九〇

七(明治四〇)年六月。

(いとう・たつや)